

月 報	日本キリスト改革派 横浜中央教会	3月号 2015年3月8日
-----	---------------------	------------------

会堂増築計画の現況

I. N

会員総会に出席できなかった教会員の方もおられますので、紙面で増築計画の現況を報告したいと思います。

増築計画が始まって既に2年余りが経ちました。これまでいろいろな問題に直面してきましたが、それでも昨年11月までは割と順調に進んできたのではと思っています。これまでの報告は年報にある通りですが、予定では11月の末には増築計画の全体像と建築費が建築会社から出されるはずでした。

しかしその報告が延ばされ、結局、建築費が提示されたのは会員総会の2日前でした。

延びてしまった理由は、最も合理的で見栄えも良い屋根、天井の構造を検討していくことや、屋根の構造計算に思った以上に時間がかかったということなどでした。時々、建築会社とは電話で連絡は取り合い、年末頃から「建築費がかさみそうだ」という事は聞かされていましたが、1月の末に提示された数字には正直なところ驚きを隠せませんでした。それをそのまま教会に報告することはできないと判断し工事内容を大きく変更することなく減額していく方法をこれまで建築会社と懸命に考えてきました。

その結果、2月の末に減額された内容を提示され、それを3月の小会で報告したところ、「建築委員会で議論の余地はある。」と認めていただきました。今後の検討課題は、更に減額していく方法は無いか良く検討しつつ、本体工事と、オプションとしている什器備品、音響設備の重要性を改めて比較検討して行く必要があるのではないかと考えています。

3月に入り、イースターの準備や、新たな委員会の始動などで建築委員会での話し合いの場もよく考えて行かなければなりません。やっと建築委員会を再開できることを感謝しています。この最後の問題を乗り越えれば、増築計画も現実のものとなっていきますので、今しばらくお待ちいただき、引き続きお折りに覚えていただければ幸いです。

最近感じたこと

T. H

月報はなぜ存在して、なぜ、教会員が書かなければならないのか、わからないのですが、牧師に最近感じたことを書田高いと言われたので、最近感じたことを書きます。

僕は、騎兵へ来て、もう4年収上が経ちました。もともと上京したかったのですが、そんなときに限って、TV番組で、都会にあこがれてきた若者が、孤立するという番組を見てしまいました。それを見て、いきなり東京へ行くのは、良くないかもしれないと思うようになりました。そして、父親が一時期横浜で働いていたこともあり、家族の理解も得やすかったので、横浜へ行くことにしました。

それだけの理由で来たせいか、最近、もう横浜にいる意味がないのではないかと考えることがよくあります。今年1月25日に、10年間営業していた「109シネマズ横浜」が閉館しました。僕が横浜へきて、横浜の映画館ではじめて行った映画館です。今までの僕の生活の一部だった施設がなくなったこともあり、よけいに横浜にいる意味について考えてしまいます。気持ちとしては、東京へ行きたい。でも、現状では無理です。

また、横浜の雰囲気にもいまいちじめないと感じるできごとがあります。それは、僕が育った環境と正反対だからかもしれません。もし熱心なクリスチャンが信仰を信じるように、自分を信じることができるのなら、この現状を変えることができるかもしれません。

でも、こう考えることもあります。もしあのときこの教会へ来てなかったら、今頃どうなっていたのかと。手を怪我して半年ぐらいのときに、僕が乗っていた電車が人身事故を起こしました。レールに残った残骸から察すると、事故にあわれた方は、亡くなったと思います。停車した車内で、うすうす状況を察した僕は、座席に座りながら、まだ自分はマシだと思ったのを覚えています。それは、一応し配してくれる教会員の方たちがいたからです。あのとき、もし教会へ行っていなかったら、僕も同じ行動をとっていたかもしれません。仮定の話をするのもどうかと思いますが、ふと考えるときがあります。

去年で、手の治療が終わりました。みなさんに祈っていただいたおかげで、医者も驚くような回復をしました。神に感謝しないとイケません。でも、もう治療の期間はおわりました。これからは、自分の力で生きていかないとイケません。あのとき、なぜ助かったのか、いまだにわかりません。でも、何か理由があって、助かったのだと思います。自分の中では、なんとなくわかるのですが、でもこれから生きて行に月次よりわかる出来事に会えるかもしれません。他者との関係、やりとりなどで、悩み考えたりする日々ですが、とりあえず、一日一日を生きていこうと思います。

子供の頃ベッドで寝ていたわたしはよく童謡のレコードを聴いていましたが、家族から「音痴ね」と言われ、恥ずかしくて歌えませんでした。小学生の頃もテストはクリアしても実技になると散々。でも高校で、授業のあと隣席の同級生が「あら、きれいな声ね」と言ったのです！生まれて初めてほめられたと言っても過言ではなく、とても嬉しかったのを覚えています。それぞれ何気ない一言だったのでしょうが、わたしには大きな作用を及ぼしました。

学生の頃、恩師三谷幸子先生から本当に音が取れない人は極小数であること、大半は音に慣れていないことによると伺い、勇気が出ました。それならひとつ実験してみようと、音楽の授業全てに挑戦、過2回2時間ずつの聖歌隊にも入りました。でもやっぱりひどかったのでしょうか、先生から暫くアルトで練習しなさいと言われてしまったのです。半年ぐらい経ってからやっとソプラノに戻りました。

卒業後は教会で讃美歌を歌う意外はほとんど歌う機会はありませんでした。職場で合唱コンクールがあったときは久々の混声四部合唱に張り切ったものです。

結婚後は教会での賛美の他に、千葉の新松戸、我孫子、埼玉の所沢と引越す度にコーラスグループ（女声三部）を見つけて声を出し続けてきました。そしてたくさんのできる指揮者や友達と出会うことができました。

横浜に来て最初に住んだ港南区の下永谷は閑静な住宅街で、コーラスもお休み。天王町に来てから近くの地区センターでコーラスグループがあるのを知り、仲間に加わりました。人った頃は20数名でしたが現在は14名。平均年齢77歳という高齢者グループになってしまいましたが、みなさん歌うのが大好きでお元気です。男性指揮者は「ところてん式のわたしたち（ひとつ注意すれば前の注意は忘れる）」を懇切丁寧に、忍の一字で指導して下さいます。「なんとなく声を出し、なんとなく歌っていると、曲もなんとなくになってしまう」、「音が芯を突いていないと美しいハーモニーにならない、縦ラインが揃わないとふにゃふにゃでリズムがきれいでない」といつも注意されます。とても難しく未だにマスターできませんが、みんな目指しています。

わたしはそれを聞きながら、「なんとなく教会へ行き、なんとなく聖書を読み、なんとなく賛美し、なんとなく祈ってはいないだろうか」とふと思いました。それはなんとなくのクリスチャンで、神様に喜ばれるだろうか、とも。

「神様は人間を楽器になるようにお造りになられた」は、三谷先生のもうひとつの教えです。許されて生きながらえる間、神様からいただいた声－ひとりひとりに与えられた天性の声をういて神様を賛美し、芯を突いたきれいなハーモニーと縦ラインの揃ったリズム感のある美しい信仰生活を歩んで行きたいと願っています。